

段玉裁『説文解字注』の成立過程について (一)

高橋由利子

一 はじめに

筆者はここ数年来その稿本の検討を中心として段玉裁の『説文解字注』の成立過程について研究を進めてきた。その対象と方法は、現在発見されている稿本について、それが段玉裁の『説文解字注』(以下『段注』と略称)の稿本であるかどうかということについての内容面からの検討を行なうことであった。このことについて、現在までに一応の検討を終えた部分は以下の如くである。

a. 中央研究院歴史語言研究所(台北)蔵『段氏説文補正』(以下『補正』と略称)の全文のマイクロフィルムを入手し、その内容面の検討から、それが『段注』の稿本であることを論証した。⁽¹⁾

b. aの成果を踏まえ、国立図書館(北京)蔵『説文解字讀』(以下『讀』と略称)を『補正』と比較対照した結果、両者に一致点が少くないことから、この『讀』も、『段注』の稿本の一つであり、かつそれらは1『補正』、2『讀』、3『段注』の順で作られたことを推定した。⁽²⁾

本稿ではこの二つを出発点とし、『補正』から『讀』への発展過程をさらに細かく検討し、『補正』の中のどのような部分が『讀』にひきつがれていったのか、またどのような部分が別に新しく加わって、次の『段注』にひきつがれてい

ったのかということについての考察を加え、最後に『段注』自体の持つ性格にもふれることを目的とする。⁽³⁾

二 『段氏説文補正』と『説文解字讀』

一で述べた作業にとりかかる前に、ここでもう一度前述のaとbについて再整理を行ない、その中のどのような点を本稿の基礎として用いるかを述べることにする。またあわせて最初にその検討を行った時に気づかなかったことや、不十分であった点についても補ってゆきたいと考える。

『補正』は本文が九十二葉の一冊本であり、そこに収められている字数も多くない。また『説文』のように十五巻に分けられておらず、字の配列も篇別ではない。今、その『補正』に収められている二百五十字を『説文』の巻数にあわせて配分し、それに『讀』と『段注』のそれぞれの巻毎の字数を対照し表示すると次のようになる。⁽⁴⁾

段 注	数		巻 数
	讀	補 正	
672	294	15	一
693	156	6	二
637	167	9	三
747	272	15	四
637	182	18	五
754	284	31	六
714	/	16	七
611	171	13	八
496	/	13	九
810	/	15	十
685	/	64	十一
781	/	9	十二
700	/	13	十三
603	/	16	十四
228	/	2	十五
9,768	1,526	250	計

ここで『補正』についてこのように巻ごとに配分した字数を示すのは、これと比較を行なったもうひとつの稿本である『讀』が巻に分けられており、しかもその中の数巻(表の斜線部分)が欠けているため、比較することのできない部分が生じることを明らかにしておく必要があるからである。また同時に『補正』や『讀』が『段注』に比べてどの程度の規模の書であるかのおおよその目安を示すためでもある。

この表を見て以下のことがわかる。

玊玊明珠光也从玉勺聲

上林賦曰明月珠子的玊江靡應劭曰靡邊也明月珠
子生於江中其光耀乃照於江邊也李善曰說文云玊
玊明珠光也玊玊與的玊音義同玉裁按漢書及文選
上林賦作的玊从白史記上林賦作玊玊从玉正同說
文說文白部無的玊字鄭詩箋云會弁如星者飾之以
玉玊玊而處攷弁制天子玉五采諸侯三采以下然則
玊玊而處攷白珠色亦非皆白也說文各本作明珠色
也初學記同今依李善所引作光今說文都歷切
玊玊玊也从玉樂聲

『補正』は、段玉裁が『説文』の注釈書を作るにあたり、まず問題のある字を適当に取り上げてまとめた簡単なノートである。その中行なわれた主な作業は、補字（原本『説文』の中にあつたにもかかわらず、現行本では脱けている字を補う、また現行本にある字でも後人の竄入によるもので本来なかつたと思われる字を削る）、改字（収録字の字形を訂正する）、補注（原本の説解部分の補充または削除）、改注（説解部分の訂正⁵⁾）の四点であつた。

字	数		卷数
	補正	讀	
294	15		一
156	6		二
167	9		三
272	15		四
182	18		五
284	31		六
171	13		八
	107		計

北京圖書館藏『説文解字讀』書影

『補正』は収録字数は少ないが、成書の段階からこのような形をしていたものと考えられるため、この本の持つ性格を全面的に検討することができる。

『讀』については、字数は『補正』に比べてずっと多いが、半分以上が欠けているため、全体的な検討は行ないにくい。ただし、現存しているものの全文が入手されればある程度の検討は可能である。

筆者は『補正』については全文を入手し、その検討を行つて次のような結論を得た。

『讀』については、北京図書館の貴重本についての規定がきびしいため、全文の入手は現在に至るまで成功していない。ただし、北京図書館を訪ねて閲覧することはできる。そのため、筆者は『補正』の全文を携帯して同図書館を訪ね、それと『讀』を比較するという方法で、『讀』についての内容の検討を進めてきた。ただし、このような方法で比較できるの

	D	C	B	A	卷一
		瑤66 璜151 珧64 瑒148 璣65 瑤206	莎201 節97	苈152 𦉳58 蒺12 禮57 蒟100 蔽98 芾99	
15	0	6	2	7	字数

	D	C	B	A	卷二
	嗟 2			呶23 必123 跬 5 吧81 唵22	
6	1	0	0	5	字数

	D	C	B	A	卷三
			諡213	誰214 舫191 囟109 肸73 𦉳46 讀241 甍224 諡155	
9	0	0	1	8	字数

	D	C	B	A	卷四
			玆194 牂195 羯196	翟50 𦉳103 𦉳200 𦉳11 鶴202 𦉳95 𦉳203 爽96 胸70 隻74 𦉳112 離67	
15	0	0	3	12	字数

	D	C	B	A	卷五
	磬154 嚙87		鹵156 輟125 號119	來115 磬230 造38 糝10 藜231 箒113 駮13 蓋89 筑239 隆31 叵37 錫19 鑿229	
18	2	0	3	13	字数

	D	C	B	A	卷六
	鄂150	幽134 楮33	栢118 梅124 圍85 曩54 邛139 臬22	賴107 欄53 棹3 郡7 栢217 櫂4 郝136 楸153 棹232 郟135 梛 ²¹⁰ ₂₄₃ 棹51 邨37 梛 ²¹¹ ₂₄₄ 棹52 邨138 梛 ²¹¹ ₂₄₄ 楸238 馮36 梛121 棹239	
31	1	2	6	22	字数

	D	C	B	A	卷八
		儻32	藝199 偃108 艘83 佺109 衰189	儿128 鯛84 俚106 舩191 届75 舩226 屮76	
13	0	1	5	7	字数

	D	C	B	A	卷數
15	0	6	2	7	一
6	1	0	0	5	二
9	0	0	1	8	三
15	0	0	3	12	四
18	2	0	3	13	五
31	1	2	6	22	六
13	0	1	5	7	七
107	4	8	21	74	

集計表

は、当然のことながら、『補正』と『讀』とで、収録の一致する字についてだけである。その可能性のある箇所および字数は九十一ページ左上に示すとおり、百七字となる。

筆者はこの百七字について、『補正』と『讀』の比較を行った。その結果、非常に高い割合で、両者の記述が一致することが判明した。その一致度を高い順から低い順にA・B・C・Dのランクで示し、それぞれに相当する字を巻数別に示すと前二ページ中の表のようである。なお、字の番号は『補正』の中での通し番号である。

この表のA類に属する字は『補正』と『讀』との一致度の最も高いもので、その記述がまったく同文か、ほとんど同文に近いものである。比較した百七字中の七十四字がこれにあたり、全体の約三分の二を占める。

B類に属する字は、『讀』においては同一字についての異なる記述が再度示され、そのうちのどちらかが『補正』と一致するもので、百七字中の二十一字がこれにあたり、全体の約五分の一である。

C類に属する字は『讀』では、『補正』の文に大幅な加筆が行なわれたり、論旨に訂正が見られるものであり、一致度はあまり高くないが、基本的には『補正』の文をふまえた上での加筆や訂正である。これは百七字中の九字で数としてはそう多くない。

D類に属する字は一致度がゼロの字で、『補正』には収められているが、『讀』には収められていない字である。いいかえれば『補正』ではこれらの字について段玉裁の注釈があるが、『讀』ではそれが見あたらないという字である。これらは百七字中四字で非常に数が少ない。しかも『補正』におけるそれらの注釈の内容をしてみると、いずれも補字または削字に関する字である。これらについては段玉裁は『讀』においては前と考え方を変えて、補充したり削除したりする必要を認めなかったため、『讀』ではとりあげなかったものと思われる。

以上、『補正』と『讀』との間で収録の一致する字について言えば、全体の三分の二が同文であり、その記述内容に

はあまりちがいが無いように見える。筆者は残りの三分の一の字について比較検討し、『補正』に比べて『讀』の方がその注釈がより詳細になっていることから、『補正』の方が『讀』よりも先に書かれたものであると推定した。

しかしながら、この推定は、全体から見ると非常に少ない字だけを比較検討して得られたものであり、特に『讀』がどのような本であり、どのような点で『補正』とちがうのかということについてはまだ検討が十分ではなかった。従ってこの点を補強することが、さきほどの推定の妥当性を高めるために必要となる。

この問題を解決するためには、まず『讀』自体の全文を入手し、それによってその性格を検討しなければならない。しかし『讀』はそもそも北京図書館にある本それ自体が、十五冊のうち八冊が欠けており完全な本ではない上に、善本についての規則がきびしく全文入手が不可能に近いことは前述したとおりである。

ところが、先般、筆者は『讀』の第一冊目についてのマイクロフィルムを入手することができた。⁽⁶⁾以下大変不十分ではあるがその資料にもとづいて、『讀』についての検討を進めることとする。

三 『説文解字讀』第一冊

『讀』の第一冊にみえる基本的な特徴を整理すると次のとおりである。

(1) 文字の配列

文字の配列は『段注』一篇上下に対応する部首の順であり、部首の中の文字の配列も、ほとんど『段注』の順と同じである。ただしある部首については収録される字がないものがある。次に部首別に字を『段注』の順に従ってあげてゆく。番号は『讀』の中での通し番号である。そのため、番号が連続していないところは、『讀』と『段注』とで字の配列がちがっていることを示している。⁽⁷⁾

一
二
三
1
2
3

禮14
禩4
福5
禩6
禩7
禩8
禩9
禩10
禩11
禩12
禩15
禩16
禩17
禩18
禩19
禩13
禩20
禩21
禩22

王 王 三 示

玉24⁸ 王23
璿25
璿26
璿27
璿28
璿29
璿30
璿31
璿32
璿33
璿34
璿35
璿36
璿37
璿38
璿39
璿40
璿41
璿42
璿43
璿44
璿45
璿46
璿47
璿48
璿49
璿50
璿51
璿52
璿53
璿54
璿55
璿56
璿57
璿58
璿59
璿60
璿61
璿62
璿63
璿64
璿65
璿66
璿67
璿68
璿69
璿70
璿71
璿72
璿73

王 王 三 示

玉166
璿168
璿167
璿169

璿124
璿125
璿126
璿127
璿128
璿129
璿130
璿131
璿132
璿133
璿134
璿135
璿136
璿137
璿138
璿139
璿140
璿141
璿142
璿143
璿144
璿145
璿146
璿147
璿148
璿149
璿150
璿151
璿152
璿153
璿154
璿155
璿156
璿157
璿158
璿159
璿160
璿161
璿162
璿163
璿164
(字)165⁹

士 气 珏

士170
璿172
璿173

艸

艸176
(字)177
璿178
璿179
璿286
璿180
璿181
璿182
璿183
璿184
璿185
璿186
璿187
璿188
璿189
璿273
璿190
璿191
璿192
璿194
璿193
璿195
璿196
璿198
璿197
璿199
璿200
璿201
璿202
璿203
璿204
璿205
璿206
璿207
璿208
璿209
璿210
璿211
璿212
璿213
璿214
璿215
璿216
璿217
璿218
璿219
璿220
璿221
璿285

苳222
苳223
苞224
苳225
苳226
苳227
苳229
苳228
苳230
苳231
苳232
苳233
苳234
苳235
苳236
苳237
苳238
苳239
苳240
苳241
苳242
苳243
苳244
苳245
苳246
苳247
苳248
苳249
苳250
苳251
苳252
苳253
苳254
苳255
苳256
苳257
苳258
苳259
苳260
苳261
苳262
苳263
苳264
苳265
苳266
苳267
苳268
苳270
苳271
苳269

折272
(字)274¹⁰
苳275
苳276
苳277
苳278
苳279
苳280
苳281
苳282
苳283
苳284
苳287
苳288
苳289

麩

苳290
苳291
苳292

苳

苳293
苳294

(2) 注釈の方法

これらの字について施されている注釈の方法には次のものがある。以下該当する字をそえて記す。

A…補字・改字・補注・改注⁽¹¹⁾

補字(刪字)

莖35
瓊36
瓊79
瓊90
瓊119
瓊194
瓊203
瓊208
瓊220
瓊247
瓊252
瓊254
瓊255
瓊259
瓊264
瓊269
瓊285
瓊286
瓊288
瓊289

改字

二 2
二 3
二 47
二 70
二 237
二 249
259

補注

玉24
齶50
瓊61
瓊62
瓊64
瓊65
瓊66
瓊71
瓊81
瓊91
瓊144
瓊147
瓊148
瓊149
瓊152
瓊159
瓊166
瓊173
瓊178
瓊187
瓊188
瓊189
瓊197
瓊209
瓊210
瓊221
瓊223
瓊224
瓊229
瓊241
瓊268

改注

3

福	5	福	5
福	6	福	6
福	7	福	7
福	8	福	8
福	15	福	15
福	19	福	19
福	24	福	24
福	37	福	37
福	38	福	38
福	39	福	39
福	42	福	42
福	44	福	44
福	51	福	51
福	52	福	52
福	53	福	53
福	55	福	55
福	56	福	56
福	57	福	57
福	58	福	58
福	73	福	73
福	77	福	77
福	80	福	80
福	82	福	82
福	85	福	85
福	86	福	86
福	94	福	94
福	96	福	96
福	103	福	103
福	105	福	105
福	110	福	110
福	111	福	111
福	114	福	114
福	116	福	116
福	117	福	117
福	127	福	127
福	139	福	139
福	140	福	140
福	143	福	143
福	145	福	145
福	145	福	145
福	153	福	153
福	156	福	156
福	164	福	164
福	165	福	165
福	171	福	171
福	168	福	168
福	183	福	183
福	184	福	184
福	185	福	185

B.. 論注。説解の文をそれに関連する文献を引用しながら追求し、その字の意味を検討する。(12)

福	186	福	186
福	200	福	200
福	205	福	205
福	206	福	206
福	207	福	207
福	213	福	213
福	214	福	214
福	315	福	315
福	218	福	218
福	232	福	232
福	242	福	242
福	243	福	243
福	250	福	250
福	256	福	256
福	257	福	257
福	258	福	258
福	260	福	260
福	24	福	24
福	47	福	47
福	62	福	62
福	64	福	64
福	66	福	66
福	70	福	70
福	144	福	144
福	209	福	209
福	221	福	221
福	224	福	224
福	229	福	229

C.. 収録字の順序について検討する。(13)

理	100	理	100
理	102	理	102
理	104	理	104
理	106	理	106
理	108	理	108
理	112	理	112
理	113	理	113
理	115	理	115
理	118	理	118
理	136	理	136
理	137	理	137
理	141	理	141
理	142	理	142
理	150	理	150
理	154	理	154
理	157	理	157
理	169	理	169
理	161	理	161
理	162	理	162
理	163	理	163
理	167	理	167
理	169	理	169
理	170	理	170
理	172	理	172
理	174	理	174
理	175	理	175
理	176	理	176
理	179	理	179
理	180	理	180
理	181	理	181
理	182	理	182
理	190	理	190
理	191	理	191
理	192	理	192
理	193	理	193
理	195	理	195
理	196	理	196
理	199	理	199
理	201	理	201
理	202	理	202
理	204	理	204
理	211	理	211
理	212	理	212
理	216	理	216
理	217	理	217
理	219	理	219
理	222	理	222
理	225	理	225
理	226	理	226
理	227	理	227

D.. 許慎の説解の中の言葉(例えば「上諱」「二曰」)についての凡例を立てる

上	1	上	1
上	49	上	49
上	72	上	72
上	292	上	292
上	272	上	272
上	211	上	211
上	292	上	292

E.. 収録字の数について検討する。(15)

福	177	福	177
福	14	福	14
福	10	福	10
福	32	福	32
福	33	福	33
福	37	福	37
福	94	福	94
福	99	福	99
福	115	福	115

F.. 反切・直音・古音の部についての注釈を加える。

次にあげるのは、他にまったく注釈がなく、「今説文〇〇切」という反切のみの音注が施されている字であるが、その他にも以上にあげたほとんどの字に、前述の注釈と同時にこのような音注が加えられている。⁽¹⁶⁾

27	璣
29	瓊
101	瓊
107	瓊
109	瓊
120	瓊
121	瓊
122	瓊
123	瓊
124	瓊
125	瓊
126	瓊
128	瓊
129	瓊
130	瓊
131	瓊
132	瓊
133	瓊
134	瓊
135	瓊
138	瓊
146	瓊
155	瓊
158	瓊

これらの特徴のうち、『補正』との対比という点にかかわるのは(2)の注釈の方法の中のA・B・Fである。

Aの「補字」「改字」「補注」「改注」という方法が見られる点は、『補正』と同じであり、『補正』の方法をそのまま踏襲しているといえよう。ただし、この中にはいくつかの注釈方法を兼ねそなえているものもあり(後に番号のみで記されるものがそれである)、それだけ注釈の方法が複雑になっているといえることができる。

Bの「論注」の方法は、『補正』においてはごくわずかなかったものであるが、『讀』においてはむしろこの方が多くなっている。これは字形や説解については校訂する必要があるものについて、その字の意味の追求という点から行われる注釈であるが、場合によっては、引用されている文献の方を説文の説解や段玉裁の理論によって校訂することがある。

Fの音注については、「反切」を末尾につけることは『補正』において見られなかったことである。ただし、古音の部についての言及は『補正』において施されているものもあり、この音に対する注釈という点において、『補正』と『讀』とがどのようにちがっているかを、更に追求する必要がある。そこで次にそれぞれの例をあげ、項を改めて検討することとする。

四 音注にみえる注釈の発展過程

『補正』において「古音〇〇部」という記述がでてくる字は、泊、涸、錫、豕、象、蠡、慘、隄、楫、參、暖、頤、

𠂔、𠂔、𠂔、必、囚、桎、桎であるが、これらはいずれも「讀若」、諧声、古文、音義などについて議論を展開し、その理論づけに「古音第〇部」が使われている。以下次にその例をいくつかあげる。

𠂔 讀若逼、

今各本作讀若秘、誤也、攷李燾說文解字五音韻譜次於職德韻注彼力切、其目錄注云𠂔讀若逼、張參五經文字𠂔字注云𠂔音逼、廣韻二十四職云𠂔彼側切、皆古音也、𠂔字在第一部、𠂔𠂔字以𠂔爲聲在第五部、次第相近、
𠂔、利也、从貝刺聲、

利今本作羸、攷漢書高帝紀晉灼注引說文𠂔利也、按𠂔利同在古音第十五部、是爲同部轉注
必、分極也、从八弋、八亦聲、

今各本作弋亦聲、誤也、弋在第一部、八在第二部、必字古音在十二部、故云八亦聲、古八讀如必
𠂔 从衣𠂔聲、

今各本作公聲、按爾雅釋文引說文云从衣从𠂔、𠂔𠂔𠂔反、或云从公衣、攷𠂔字古音在第十四部與𠂔字同部、禮記多借卷字爲之、卷亦同部也、𠂔與公隸相倍、因誤公矣、今正爲从衣𠂔聲、
五經文字曰沿隸省作𠂔

𠂔、𠂔也、从人里聲、

今本𠂔作𠂔、誤也、漢書李布傳晉灼注引楊雄方言𠂔𠂔也、引許慎說文𠂔𠂔也、是晉時說文與今本不同、今誤、以方言改說文也、𠂔許氏曰耳鳴也、𠂔在古音第一部、𠂔在第三部、俗稱無𠂔爲無𠂔者、部近假借、說文多用本義、不當以耳鳴釋𠂔字也、

これらの例を見てみると、ここにおいては収録字の字体や説解の文を補ったり改めたりすることに重点があり、その字自体の古音の所屬や、今音との関係について、独自に注をつけているのではない。

このような方法での古音の引用は、『讀』においても見られる。以上にあげた例のうち頤、頼、必、俚は、『讀』も『補正』と同文である。『讀』の第一冊に見られる同様のものとしては、次のような例がある（禩は関連部分のみ引用）。

禩、或祀字也、从示異聲、

各本作祀或从異四字、今補正、……玉裁按、先鄭兩言故書禩或作祀、故許以禩爲祀之或體、已聲異聲同在之哈部也、……

珉、石之美者、从玉民聲、

周官弁師璠玉、釋文璠本又作璠、疏曰說文云珉石之美者从玉民聲、玉裁按、昏聲在諄文魂部、民聲在眞臻部、古璠珉各字、自昏字譌从民作昏則又每以昏聲民聲不分、如瘡字或妄改爲痕、璠珉各字而俗云一字是也、說文有玟又有璠、璠正珉字之譌耳、璠珉皆美石、故尤易混亂、今說文武巾切、

以上あげたものは、みな字形や説解の校訂の理論づけや補強に、古音の所屬をあげた例である。しかし、『讀』ではこの他に、これらとは少しちがった方法で、古音の所屬を示している例が見られる。以下にその字と関連する箇所のみを抜粋して記すが、これらはいずれもその前に、字の意味についての注釈が加えられた後、最後に置かれている部分である。

社：古者在魚模部、今常者切、

瓊：古音在元寒部、今說文渠營切、

艸：古音在尤幽部、今說文倉老切、

藹：李善藹音若、陸德明藹音弱、玉裁按古音在蕭肴部、

藿：陸德明羊六反、今說文餘六切、古音在蕭豪部、

これらはみな今音と対比して、古音の部を出しているものであり、『補正』においては見られなかったものである。前章で、『讀』に新しく加わった注釈方法として、「今説文○○切」という表現をあげたが、このような今音についての反切がついていることが、それとの対比における古音の記述の前提条件でもあったのである。

また、ここで「古音在○部」とある例は、いずれも反切等から帰納される『廣韻』の韻目の対応する古音の所属からはずれるもの（すなわち段玉裁の『六書音均表』巻一「今韵古分十七部表」の原則と合わないもの）であり、そのため段玉裁はわざわざ『讀』において「古音は○部に在る」と注をしたのである。

段玉裁は『段注』においてはほとんどすべての字の末尾に「○○切」という反切をつけ、「古音○部」という古音を示す注をつけた。その際に、ただ「古音○部」という場合と、「○部」の前に「在」を加えて「古音在○部」とする場合とで、意味を区別した。すなわち、今音の反切から帰納される古音の所属と、その古音が一致する場合には前者、一致しない場合には後者の表現を用いたのである。そうしてみると、この『讀』での「今説文○○切、古音在○部」という表現は、この後者の例の原型といえる。いいかえれば、段玉裁は『讀』において、このような例についての音注を加え始めたのである。

最後にもう一度、『補正』『讀』『段注』の三者における音についての注釈の変化について考えると、次のようにいうことができる。

『補正』では、段玉裁の古音についての記述は字形や説解の校訂に用いられた⁽¹⁸⁾。

『讀』では今音の反切を加え、それから帰納される古音とあわなないものについて「古音在○部」という注釈をつけることを始めた。これらの根拠となった理論は、いずれも、すでにできあがっていた『六書音均表』にもとづいていた。

『段注』では周知のごとく、すべての字に反切と古音の所属が書かれ、巻末に『六書音均表』がつけられたが、それ

に至る流れは、すでに『補正』から『讀』への展開の中に始まっていたのである。

注

- (1) 中央研究院歴史語言研究所藏『段氏説文補正』について お茶の水女子大学中国文学会報第一号(一九八二・四)。
- (2) 『段氏説文補正』と『説文解字讀』 同会報第二号(一九八三・四)。
- (3) 本稿は次の二回の口頭発表を補充してまとめたものである。段玉裁『説文解字注』以前写的兩種稿本(東京外国語大学 一九八四・六・二一) 段玉裁『説文解字注』の成立過程について(早稲田大学 一九八六・七・五)。
- (4) 重出字を含む。また許慎の序や字数についての注釈のつけられている箇所もこれを含む。また『補正』については一字の注釈が『段注』での異なる巻の数字に分散している場合があるため巻毎の字数の総計と総字数は一致しない。
- (5) 具体例については注(1)参照。
- (6) 一九八四年夏に入手。同年春に老舎著作愛好者第三回訪中団の団員として北京を訪れた際に北京図書館に申請した結果届いたもの。最初の八十八葉は段玉裁の直筆とされる。(七十七ページ書影参照)。「讀」のマイクロフィルム入手はこれが二回目であるが、一回目は表紙から序に到る九コマしか認められなかった。今回入手したのは第一冊の本文全部で、計百四十八コマ、二百九十五字が収められている。京都産業大学の阿辻哲次氏は一九八〇年春に序を含む六十数葉を書写し東方学報第五十三冊に発表された。それは字数でいうと最初の五十一字分にあたる。なお阿辻氏のその後の関係論著には北京図書館蔵段玉裁『説文解字讀』初探(日本中国学会報第三十三集 一九八一)、『漢字学』(東海大学出版会 一九八五)がある。
- (7) また筆者が一九八五年夏到北京図書館を訪れた際、『讀』の全文が将来出版されるともきいた(善本組王副長の話による)。
- (8) 例え²⁸⁵ば苗字は『讀』では小徐本を支持しその順に従って大徐を批判している。『段注』では大徐本に従っており、小徐について²⁴は注でふれている。
- (9) 玉の²⁴あとに本²⁴当に²⁴玉(古文の玉)が入るが、『讀』の本文ではそこが空白になっていたため番号からもれた。なお『讀』で

はこれ以外にも小篆や古文などの複雑な字体が入る箇所を空白にしている所がある。

(9) 許慎の字数を述べた部分に対する注。ここでは「文一百二十四 重十六」とし、徐鍇本が重十五とするのは誤りとしている。これは珉字⁷⁹の注の中で珉字を補ったことからくるものであろう。

(10) 「左文五十三 重二 大篆从艸」に対する注。

(11) 方法としては『補正』と同じであるのですべてについて例をあげることとはしないが、補字の例と改字・改注の例を次にあげる(標点筆者)。なお、本稿の重点は『補正』から『讀』への発展過程にあるため、『讀』と『段注』の異同には特にふれない。

〔補字例〕

奎、奎瓚、玉也、从玉來聲、

瓚、瓚瓚也、从玉賣聲、

各本無瓚篆文併解說、今訂補、瓚字下既云瓚瓚則脫落甚明、此即舊本璠璠二篆脫瓚之類也、廣雅玉內列瓚瓚、此亦合二字成文者、廣韻奎字注引說文云瓚玉也、刪去奎字使文理不通、今本說文每多此病矣、玉篇奎瓚二字亦分隔兩處、又引史記崑山出瓚玉、疑今本大宛傳贊有譌字今史記無此語、

〔改字・改注例〕

珉、古文璠也、从玉从月、月亦聲、

珉各本譌作珉、廣韻亦同、惟玉篇云珉古文、不誤、月莫報反、虞翻別傳謂月字似同、蓋以月爲古冒字、與許云珉爲古文璠合也、今訂正、解說十三字各本作古文省三字、

なおこの字の前の璠字の注釈の一部が、段玉裁の『古文尚書撰異』二十六顧命「上宗奉同理由阼階隣」の注に引く『說文解字讀』の文と一致している。従ってこの『讀』は『撰異』ですぐあとに述べられている『說文解字讀初稿』ではないことがわかる。ついでに錢大昕の『竹汀先生日記鈔』卷一にふれられている『說文解字讀第一本』との異同を見てみると、芹・菴・禪・蓋については異なっているが、上諱(注(14)参照)については同じである。従ってこの『第一本』は『讀』とは別

のものか、あるいは一部を変更したものであると思われる。ただしこの『竹汀先生日記鈔』の編者である錢大昕の弟子の何元錫は同時にこの『讀』の所蔵者（第一冊〜第四冊のはじめに何元錫の印がある）でもあり、また段玉裁と同席したこともある（劉盼遂『段玉裁年譜』嘉慶五年十一月および十二年九月の項）ようなので、この三人の関係から『讀』についての考察を加えることもできる。

(12) 例えば次の例がある。

琀、治玉也、一曰琀石似玉、从玉周聲、

爾雅玉謂之雕、攷工記剗摩之工玉柳雕矢磬、詩追琢其章、金玉其相、毛傳追彫也、金曰彫、玉曰琢、玉裁按、毛公依下句爲此訓、實則彫琢皆治玉之事、金謂之鏤、詩以彫代鏤耳、周官追師鄭注追治玉石之名、趙岐孟子注彫琢治飾玉也、引詩彫琢其章、追彫音同紐、猶數弓卽彫弓、琀是正字、彫雕皆同音假借、古彝器銘多云琀戈也、一曰己下別一義、今說文都僚切、

(13) 同一字について的小篆・古文・或体などの順序について論じたり、同一部首内での字の配列について論及するもの。

(14) 上諱についての注釈。天子の諱名についての論が荘字にあたる部分で展開されている。『段注』では同じ議論が祐字のところにある。

(15) 注(9)(10)参照。

(16) 注(12)の例文参照。

(17) 他に序文の字の押韻に関するものがある。

(18) このことは、逆にいえば、段玉裁は自らの『六書音均表』の理論に合わせて、まずその要となる字かなについて、諧声符を含む字形や説解の文の校訂を行っていったということにもなる。従ってこの校訂のやり方を細かく検討することによって、逆に段玉裁の『六書音均表』の形成と改訂をあとづけることもできるのではないかと考えられる。また今回は「古音○部」という記述にのみ対象を限定したが、これを「○声」という諧声を示す注釈にまで広げて見てゆくことも必要であろう。なおこのような考え方については倉石武四郎「六書音均表について」(支那学第十卷特別号 一九三三)から教示を得た。

また同様に、段玉裁の他の著作の中に見える説文所収字についての注釈とも比較対照して検討することも非常に重要であると考えられる。例えば『經韻樓集』卷五の「説文劉字攷」・「溷濡灑三字攷」・「胸忍攷」や『詩經小學』卷二十五肇革の項は、それぞれ『補正』の劉⁶³、濡¹⁷⁷、胸⁷⁰、瑜¹⁴⁸の注釈に対応している。また「説荷」(『經韻樓集』卷五)は『讀』²³²の荷の注釈に対応している。

(19) ほとんどが「今説文○○切」という表現で、大徐本の反切を採用している。ただし、²⁶⁴次字においては「広韻疾資切、是、今説文疾茲切、非也」として『広韻』の反切を採用しているが、これは段玉裁の之部・脂部・支部の区別に関係するためと思われる。(資↓脂部 茲↓之部)